東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

ライブラリー・セミナー傍聴記：「バッハの神学文庫 ー J.S. バッハ響きの"謎"を探るー」 講師 丸山桂介先生

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-05-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 稲川, 香於里, Inagawa, Kaori
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1083

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ライブラリー・セミナー傍聴記

「バッハの神学文庫 ― J.S. バッハ 響きの〝謎〟を探る ―」

講師　丸山 桂介 先生

報告：稲川 香於里／付属図書館

2015 年 11 月 1 日（日）13:00 ～ 図書館 5 階グループ学習室にてライブラリー・セミナーが開催された。

J.S. バッハ作品の神学的見地からの研究に必要な様々な資料を図書館にご寄贈くださった本学元講師丸山桂介先生をセミナー講師にお迎えし、「バッハの神学文庫　― J.S. バッハの響きの謎を探る ―」と題した講演を 2 時間半に亘り行っていただいた。当日は、60 名以上の方々がご参加くださり、会場は満席、静寂の中にも熱気あふれる雰囲気の中、セミナーはスタートした。

講演の論点として、1.　J.S. バッハの教会音楽家としての社会的な立場と当時の事情、2.　カンタータと説教、3.　バッハと神学、4.　器楽曲と神学 ～インヴェンションの分析を通して～ の 4 点が、冒頭掲げられた。そしてこれらは、次のような理由から、バッハ作品を知る上で重要であることも述べられた。1. については、バッハが教会音楽家として過ごすということがどのような意味を持っていたか、当時の教会、信仰を取り巻く事情や常識を理解する必要がある。2. について。礼拝で演奏されるカンタータ（音楽）は、神の言葉を人々にわかりやすく普及する一環として提供される。従ってその音楽は、教会暦を反映した当日の牧師の説教の内容と密接な関わりがあることを意識する必要がある。3.　については、説教の背後にある当時の神学がどのようなものであったか、テキストの背後にある神学上の問題を捉える必要がある。特に、「創造」の業がどういう意味を持っていたのかを、神学的見地から考える。4.　について、バッハにとって、器楽曲と教会音楽に創作上の境界線はないということを、インヴェンションを具体例に挙げて繙く。

講演は、バッハの創作、音の始源がどこにあるのかを常に意識しながら展開される。カンタータの歌詞の元となるテキストはルター派の中でどのようにまとめられたものなのか、当時新しい考え方が出てきていたルター派教会の中で、バッハ自身はどのような立場をとり、考えを持っていたのか、それらをどのように音に反映させたのか、どのような手段で、何を伝えようとした

のか。当時の音楽、信仰を取り巻く背景を踏まえ、それぞれの局面で具体的な例を挙げながら、進められた。

例えば当時の音楽観について、M. プレトリウスの『音楽大全』[1] の扉絵とヨハン・アルント[2] の説教集 “Postilla” [3] の扉絵の構図を対照し、その双方がそれぞれに当時の宗教的宇宙観を反映していることから、音楽が当時いかに神聖なものとして捉えられていたかが窺えるとの指摘だった。

またカンタータ 61 番《いざ来たれ、異教徒の救い主よ Nun komm, der Heiden Heiland (Cantata), BWV 61》の Overture について、アーノンクール [4] とリリング [5]、二者の演奏（録音）を対比し、前者が当時の演奏習慣に倣いフランス宮廷様式で、堂々たる王の登場を表現しているのに対し、後者は旧約聖書「ゼカリヤ書」9 章に由来する歌詞の意味を汲んで、神に対してへりくだった王の姿を表現していることが指摘された。

バッハの教会音楽、カンタータ創作を知る上で、そのテキストの意味、またそのテキストの更に背景にある信条、聖書の文脈まで追究して捉えることの大切さが伝わってくる講演であった。またそうした神学的な要素は、ゲマトリアの手法によって器楽作品においても表現されていることが指摘された。器楽作品におけるゲマトリアに関する更なる探究は、次の講義の機会 [6] に譲られ、余韻を残す形で締めくくられた。

筆者は、結果として響いてくる音を楽しむことで満足していたが、その音の背後にある深遠なる思想を本講演でまざまざと見せつけられ、改めて J.S. バッハの偉大さ、思慮深さを思い知らされた。丸山先生が繰り返し強調されていた、バッハの楽譜をどう読むのか、フレーズをどう捉えるか、そのためにバッハの創造に対する考え方を探究していき、演奏に結び付ける必要があるというお話は、参加されていた若い学生にも大変刺激になったであろう。

講演終了後には、短い時間ながら、講師と参加者の間で活発な質疑応答が交わされた。

---

1 Syntagma musicum : Wolfenbüttel 1619, Band II, De organographia : Michael Praetorius ; Faksimile-Nachdruck. -- 3. Aufl. -- Bärenreiter, 1968.（請求番号 M0.8/D659/1-14）、巻末図版集の冒頭ページ [p. 237] 参照のこと。

2 Johann Arndt (1555 – 1621) ドイツ・ルター派の神学者。

3 丸山桂介先生より寄贈されたマイクロフィルム資料（請求番号 V194M/Ar61-1/1OR-5OR）に所収。

4 当館所蔵資料 A2332 または A2803 を参照のこと。

5 当館所蔵資料 2648-2651 を参照のこと。

6 2016 年 2 月 27 日（土）13:00 ～ 当館 5 階グループ学習室にて本講演の続編が開催された。

末筆ながら、ご自身が時間をかけ、足を運び収集された貴重な資料を当館にご寄贈[7]くださるとともに、それら資料のバッハ研究における意義の啓蒙のために、セミナー講師を快くお引き受けくださった丸山桂介先生には心から感謝の意を表したい。また、当館企画のセミナーに関心を持ってくださり、ご参加くださった皆さまにもこの場を借りてお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

---

[7] 本誌 37 ページ～ 42 ページに、寄贈リストを掲載した。